

新年明けましておめでとうございます



女王谷の結婚式・花嫁と付き添いたち(詳細は、四姑娘山写真だより8ページ)

中国四川省 2008年11月1日撮影
 四姑娘山自然保護区管理局・特別顧問・大川健三

「わんりい」140号の主な目次

北京雑感その(31)「住宅の新築」	2
私の調べた四字熟語(29)「匹夫之勇」	3
媛媛講故事(10)「嫦娥奔月(嫦娥、月に上る)」	4
中国を読む(58) 番外:ラオス・山の子どもたちに	5
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より	5
台湾 - 美麗宝島① 北大武山	6
四姑娘山・写真便り(15)「女王谷の結婚式」	8
成都の家庭料理・麻婆豆腐の作り方	9
スリランカ紹介(25)「ジャフナ珍道中 I」	10
アフリカとの出会い・特別寄稿「YES, WE CAN!」	11
私の四川省一人旅(21) 亜丁 VIII	12
中国・東北三省の旅(2)「広開土王の夢のあと」	14
“わんりい”【活動報告】「京劇わくわく講座」	16
“わんりい”掲示板	18

♪「中国語で歌おう!会」・11月の歌♪

「長江之歌」&「回家看看」

於: まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、
 小田急線南口徒歩5分町田東急裏 109 ファッションビル 7F

1月23日(金) 19:00 ~ 20:30

指導: 趙鳳英 (中国人歌手)

ご参加の方は録音機をお持ち下さい

● ご予約ください!

「中国で歌おう!会」 2月の講座日は
 2月20日(金) 19:00 ~ 20:30 です

* 初めてご参加の方は、会場、日時など「わんりい」事務局へお問合せ下さい。

ビジネスマインドが欠如する私でも北京でやってみたいビジネスが二つありました。一つは前月お話しした喫茶店経営で、これは、自身の生活体験から思いついたことでしたが、喫茶店が珍しくなくなった今日では、時機を逸したといえるでしょう。もう一つは、友人が家を建てるのを目の当りにして思ったことです。

もう7,8年まえのことになりますが、北京の友人がマンションを購入しました。三環状線内側の落ち着いた地域で、しかも交通の便の良いところ。広さは180平米程あり、洗面所が2箇所あるものですが、価格は、当時の日本円に換算して、400万円程だったと思います。

とても安いので吃驚しましたが、その場所に連れて行ってもらって、もっとビックリ。ドアを開けると、そこにはコンクリートがむき出しの、何も無い空間が広がっていました。ご存知の通り、中国では、家の購入イコール建物のスペース購入なのです。購入した人は、自分の好みに従って内装を施します。内部の壁さえも、建物の構造上必要なもの以外は取り払うことができます。

購入者は、先ず設計士を選んで、図面を基に自分の希望を話しながら、設計士と一緒に部屋の配置を決め、必要な壁や間仕切り・ドア等の位置も決めます。設計士との関係はこれで終わりますが、多くの場合、設計士に依頼して、大工さん、左官屋さん、電気設備屋さん、内装屋さん等を紹介して貰います。

設計士さんに紹介して貰って、大工さんが電気設備屋さんや左官さんを連れてきても、仕事の契約は、職種毎にそれぞれの仕事人と個別に交します。日本のように、大工の棟梁が完成まで全てに責任を負うと言うようなことはありません。仕事をする人たちの連絡が悪く、工事が頓挫して、友人があちこちに電話を掛けて調整しなければならぬことも度々でした。

でも、本当の大変さは、こんなものではありません。中国での家作りでは、内装の材料を自分で買い集めなければならないのです。床を例に取れば、この部屋はタイル張り、あの部屋は板張り等ときめたら、販売店に行き、どんなタイルにするか、どんな板にするかを、自分自身で選ぶのです。設計士さんをお願いして、一緒に店に行き選ぶを手伝って貰うことはできますが、主体はあくまでも施工主です。どれだけの量必要かは、設計士さんのアドバイスを受けて、少し多めに買います。余ったら、その分は返品が出来るのです。そして、この買出しは、備え付けの調理台、バスタブから、ドアノブ、シャワーや水道の蛇口、タオルハ

ンガー等々細々とした部品まで、全部自分で選んで買わなければならないのです。私など、考えただけで疲れが出てきてしまいます。

唯一の救いは、これら用品を買うのに、殆ど一箇所で済むことです。家を建てる時必要なものは、「○○五金城」と呼ばれる金物市場で全部揃います。北京の建築ブームを受けて、大きな市場が市内に多数あります。(ブームが去ったら、どうなるか心配になる程のボリュームです。)

日本では最近、かなり大規模なショッピングモールや、アウトレットモールが出現していますが、ちょうどそんな感じで、違うところは、一つ一つのお店が全部金物を買っている点です。全体の規模は、日本のものとは比べ物にならない位大きいものが殆どです。それぞれの店が趣を異にし、ディスプレイを工夫して商品を並べています。中には、日本の街中の金物屋さんと同様、雑然と商品を並べているお店もあつたりして、ぶらぶら見て歩くには面白いのですが、必要なものを買集めるとなると、その労力は大変なものです。

そんな大変な思いをしてやっと完成させた家ですが、夏にクーラーを点けようとしたら、書斎のクーラーのスイッチがありません。取り付け業者に連絡をして来て貰い調べると、壁面に取り付けなければならないスイッチが、取り付けられないまま、壁の裏側に放置されていました。又別の日、クーラーを長い間点けていたら、天井から水が漏れて来ました。これも調べて貰うと、クーラーから出た水を流す排水管の傾斜が少なくて、溜まった水が溢れ出たためと分かりました。

こんな時、工事をした人達は、次の仕事をした人に責任を負わせようとします。施工主である友人は、彼らを前に「全員の責任で、使えるようにやり直せ」と強く言って、修理させました。

そんなテンヤワンヤを見ていて、施工主の負担を少なくし、工事をきちんと完成させるためには、施工主から全部任されて、工事全般を取り仕切る役割が必要だと思いました。建築コーディネーターと言うような仕事を始めたら、需要が多いのではないかと思います。

因みに、昨年、友人のマンションの最上階、いわゆるペントハウスがなかなか売れないので、不動産会社が内装を施して、完成品として売りに出すことにしました。これからは、日本と同じような販売方法が多くなるかも知れませんね。

私のビジネスチャンスはまた無くなります。

匹夫之勇(ひつぷのゆう)

私が調べた四字熟語 二十九

三澤 統

ある会社の若い社員が仕事で失敗をして周囲から責められ、ヤケを起こし血気にはやるままに前後の見境もなく「こんな会社辞めてやる!」と飛び出そうとしました。先輩社員が「今、会社を飛び出すのは匹夫之勇というものだよ。君一人が責任をとって辞めればいいという問題じゃないんだ。ここは叱られても辛抱して留まって解決に力をつくすのが真の勇気じゃないのか」と言って若い社員を引きとめました。「匹夫之勇」はこのような場面で使われています。

辞書を調べてみましょう。

三省堂 現代国語辞典では、「匹

夫の勇：道理もわからずに、ただ血気にはやるだけの勇気」

小学館 中日辞典では、「匹夫之勇(pǐ fū zhī yǒng)」：血気にはやるだけの向こうみずな勇気

と、載っています。

この成語の出典は (国語^注)・越国上)です。

(出典には、他に「孟子・梁恵王下」もあるのですが、ここでは「国語・越国上」に述べられている故事に基づくとします)

中国は春秋の時代、越王の勾践は呉王の夫差との戦いに敗れて三年間拘禁され不遇をなめつくしました。拘禁が解けて国に戻った後、彼は臥薪嘗胆し、自らを励ましながらかし、なんとかして国を立て直そうと思うと共に、呉への復讐を決意しました。

十数年が過ぎ、越国は日に日に力をつけ、軍隊も強くなりました。そこで、将兵たちは度重ねて勾践に次のような戦の下命を願い出しました。

「君主さま、越国の民は自分たちの父母を敬愛するようにあなた様を敬愛しております。今、子供たちは父母に代わって復讐をしたいと思ひ、臣下たちは君主さまに代わって復讐をしようと思っております。ですからどうぞご下命をお願いします。私たちは呉国と死を覚悟で全力で戦いたいと願っています」

勾践は兵士たちの呉国との決戦の願いを承認し、軍隊を召集して彼らに向かって次のように決意を表明し兵士たちを督励しました。

「私は、古代の賢明な君主たちは兵士の数が多少不

足であってもあまり心配をしなかったが、それよりも兵士たちが自分で状況を見極める力の不足を心配したと聞いている。私は諸君が戦うに当たって、知略をめぐらさず、ただ単に個人の勇敢さだけを頼りにすることは望んでいない。個人の勇敢さだけを頼ればきっと失敗する。私は諸君が作戦に基づいて戦って欲しいと望んでいる。また前進するときも後退するときも一丸となって欲しい。進む時は褒章を想像し、後退する時は厳しい処罰をを想像するが良い。そのようにすれば諸君は必ず敵を打ち負かし、褒章を手にすることができるのだ。命令に従わず前に進んだり、恥じることなく退けば、直ちに厳しい処罰を受けるであろうと心得て欲しい。」

いよいよ出兵の時が来て、越国の人々は皆、越王の話の思い出しお互いに励まし合いました。そして兵士全体の闘志が高揚し、終に呉王の夫差を打ち負かし、呉国を滅ぼすことができたのです。

(注記)

国語(こくご)：春秋時代の中国を扱った歴史書である。著者は『春秋左氏伝』の著者とされる魯の左丘明であると言われているが定かではない。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

‘わんりい’のおたより会員へのお誘い

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し、文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わんりい’は、会員の皆さんから寄せられた原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

*紙面が16pと限られていますので、掲載まで暫くお待ち頂くことがあります。また、紙面の都合で作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

「月には誰かが住んでいますか？」と中国人に訊いてみてください。多分殆どの人が「嫦娥が住んでいます」と答えるでしょう。嫦娥は中国の伝説に伝わる月の女神です。嫦娥は元々は九つの太陽を射ち落とした後羿(わんりい 2008年7月号/135号)の妻でしたが、どうして月に住んで居るのでしょうか。

後羿は九つの太陽を射ち落して大きな功績を挙げましたが、他の神々から中傷され、天帝はそれらの讒言を信じました。後羿は人間の世界に格下げされ、妻の嫦娥とともに人間界に降りて来たといわれています。

後羿とその妻の嫦娥は人間界に降りてきてからも、仲睦まじく幸せな生活を送っていました。その頃、下界では猛獣が出没し、人間や家畜を襲ったりしていました。後羿は矢を射るにかけては天下一の腕前を奮って人々のために猛獣の害を取り除いたり、獲物を分け与えたりしましたので、夫婦は多くの人望を集めていました。

しかし、後羿には悩みがありました。神としての資格を失いましたので人間同様の貧しい生活に加えて、寿命も決められることになり、最愛の妻にすまないと思っていました。

ある日、後羿は崑崙山に住む神の西王母のところに妙薬があり、それを飲めば不老不死になれると共に、天に上り仙人になることもできると聞きました。後羿はすぐ旅立ち、はるばる西王母を尋ねました。西王母も後羿夫婦の数々の善行に心を打たれましたが、薬は一人分しかありませんでした。

後羿はどうするか悩みながらも薬を持ち帰り、事実を妻に告げました。結局、愛し合う二人はどちらも、

自分だけが薬を飲んで天界に上り仙人になることを拒否し、薬は箆筒にしまいました。

後羿の弟子・蓬蒙という悪賢いものが薬のことを知りました。蓬蒙は仙人になればどれほど良いだろうと思い、その薬を盗もうと考えました。

8月15日、後羿は狩に出かけて留守でした。蓬蒙は後羿の部屋に忍び込み薬を盗もうとしていましたが嫦娥に見られてしまいました。「悪人が仙人になれる薬を飲むのは決して許せない」嫦娥は必死で蓬蒙から薬を奪い取ると、急いで自分で飲んでしまいました。するとそのとたん嫦娥の身体は突然軽くなり、ゆっくりと浮かび上がり、そして窓を抜けて空へと舞い上がっていきました。嫦娥は上へ上へと上りながら、もう夫には会えないなら少しでも人間界に近いところにいたいと願い、月に向かって舞い上がって行きました。

夕方、後羿が帰ってきました。しかし妻の姿はどこにも見当たりませんでした。

家人から詳しく話を聞いた後羿の心は、今にも張り裂けそうでした。そして後羿がなにげなく窓から空を望むと、その日の月はいつもよりも真ん丸く明るく輝いて妻の姿が月に映って見えました。そして後羿は「ああ、妻はこれからずっと月に居て私を見守っている」と信じることができたのです。

近所の人々も、嫦娥が月に上って、月の神になったと知り、日頃嫦娥夫婦に色々世話になっていたので、それ以来満月の夜には庭にテーブルを出し、お菓子や、果物などを並べて月に住むことになった嫦娥を祭るようになりました。

それが中秋節の起源といわれています。



NHK番組「地球アゴラ」(2008年11月16日BS & 2008年12月12日総合) で放映された安井清子さんの活動を見て思ったこと

真中智子

NHKの番組*で安井清子さんの活動を拝見しました。安井さんの活動は、刺繍絵本の展覧会に伺ったり、「わりい」の記事や著書を読んだり、情報としてはありました。「安井さん」とは…、「ラオスの子どもたちに、絵本を通じて触れ合い活躍されている方」「絵本の力に手ごたえを感じて、絵本のたくさんある子どもたちの居場所を作るため行動している方」。使えない私の「辞書」の情報はそこまで、そんな豊かな生き方もあるんだなあ…と、ぼんやりストップしていました。

テレビの安井さんは、記憶と変わらず素敵な方でした。着実に、その地で受け入れられ消化されていく活動を行っている方の静かな自信と落ち着きがそのまま映っているようでした。1年半前に出来上がったラオス・G村の図書館は、木のぬくもりが伝わってきそうな居心地のよい場所で、そこにはたくさんの子どもが、寝ころがり、縁側で座ったり、思い思いの姿勢で本に夢中になっ

ていました。足の踏み場もない図書館は、安井さんの言葉借りると「外の世界の窓」。そう思うと、床にうつぶせになって絵本を見ている子どもたちは、大きな世界を窓から覗き込んでいるよう。

最近、見たい映画で「未来を写した子どもたち」があります。インドの売春窟で生まれた子どもたち、閉塞感に押しつぶされそうになりながら生きる彼らにカメラを渡し、ファインダーから世界を見、表現することを教えた女性カメラマンのドキュメンタリーです。

窓やファインダーがないと、世の中が歪んで映ったり、敵ばかりに見えたり、もしかしたら世界自体が見えないかもしれない。1冊の絵本、1つのインスタントカメラは、自分と世界をつなげてくれる大切な媒介なんですね。感動しました。



ラオスの山の村にできた可愛い図書館



絵本に夢中・ラオス山の子どもたち

*放送の様子は「山の子どもたちに絵本を！」でネット検索をするとご覧になれます。

松本杏花さんの俳句

yú qíng cán xīn 「余情残心」より

雪の路地青竹新た四つ目垣

chá yuàn ruì xuě pù
茶苑瑞雪鋪

zhǎn xīn lí bā yóu xǐng mù
嶄新籬笆尤醒目

bái dì lù qīng zhú
白地露青竹

季語：雪，冬

赏析：本首俳句中的“路地”是指日本茶道草庵式茶室的庭院，一般分为内院和外院，布有脚踏石和花木。

皑皑白雪，翠翠青竹，茶苑焕然一新，清雅静谧。白与青均属冷色调，令人生兰心蕙性。如此环境，烘托出了意境深邃，韵味悠长的效果。

瑠璃色に街透き通る寒の風

shuō fēng jìn qiè hán
朔风劲且寒

jiē hù xiàng zhái yī tòu chuān
街户巷宅一透穿

hū xiào liú zǐ lán
呼啸留紫蓝

季語：朔風，即寒風，冬

赏析：我国唐代大诗人李白在《嘲王历阳不肯饮酒》中吟道：“地白风色寒，雪花大如手。”孟郊在《苦寒吟》中则吟道：“天寒色青苍，北风叫枯桑。”都形容寒风的色彩。特别是孟郊的“青苍”，与杏花女士的“紫蓝”可谓同工异曲，令人击节叫好！



北大武山山頂、台湾鉄杉の樹相が美しい

■台湾、登山事情

台湾の山に登るには、いろいろ厄介な台湾の決まりがある。外国人は関係機関（警察など）に入山許可を得て入山する。山域の呼び方も「山地管制区」とか「国家公園」とかがあり、この違いは外国人にはわからない。さらに3000m以上の山に登る場合、外国人だけでなく台湾人も、登山指導有資格者1名の同行が必要、また最低3人以上の人数で等々…。これらの手続き、車の手配などは部外者の手に余るので、以前ツテがあった台北の「中華民国遯溪協會」に依頼して整えてもらった。連絡したのは9月末だったが、11月から12月は台湾の登山シーズンで、台湾国内の登山者多数が、入山許可を申請するための許認可交付事務が集中する。もっと早い時期に連絡がほしかったそうで、会長の莊さんに迷惑をかけてしまった。計画2カ月前では手続きが忙しいのである。

台湾の登山ではなぜ面倒な手続きがいるのか？。ここからは私の推測だが、日本統治時代に治安上の理由（少数民族との摩擦など）で、2500m以上の山間部を通行するには許可が必要だったのでこれを踏襲、中国大陸からの諜報活動を警戒、そしてこれだけチェックされると、無謀登山が無くなり、安全性が高められる。こんなところかなと思っている。ともあれ、他国の規則なので尊重しなければならない。

■台湾、山岳国

台湾は、九州より少し小さいサツマイモ形の島である。この島に最高峰玉山（昔は新高山）3952mを筆頭に3000mを越える山が258座あるといえば、少しでも登山に興味のある人は驚く。驚くのもそのはず、日本では3000m以上の山は21座で、富士山こそ3700m台だが、残りの20山は、やっと3000mを越える程度で「山国日本」も台湾に比べると、顔色なしだ。台湾では高山がひしめいているといえよう。



北大武山入山許可証

台湾にも台湾版の「百名山」があり、「台湾百岳」という。前置きが長くなったが、今回登った「北大武山」はその「台湾百岳」のなかで最南端にあり、玄関駅が高雄というわけだ。

'08年11月21日、台北駅から7:00発の台湾新幹線で終点の「左営」へ行った。メンバーは私と妻、リーダーで遯溪協會の重鎮、張麗雲さんの3人。張女士は若いときは困難な沢登りを何本もこなしたが、そんな経歴を感じさせない、控えめで小柄な人だ。以前アルバイトで来日したことがあり、日本語の日常会話ができる。

新幹線は高雄中心部には入らず、手前の高雄市左営区の「左営」駅が当面の発着駅で、日本の東北新幹線が長らく大宮発着だったようなものだろう。

8:36左営着。携帯で通話しながら小走りに歩く張さんのあとに付いて、改札を出る。続いてエレベーターで屋上へ運ばれるとそこは駅駐車場で、お迎えの車もすでに停車していた。運転手は大柄で鍛え上げた体つきの陳さん、車は少しくたびれた四駆車（三菱デリカ）だった。陳さんは山岳ガイドもするし、登山口への輸送等も請け負う。北大武山の登山口へはここ数日は連日行っていると、陳さん経由で説明された。走り出すと駐車場からの誘導路はじかに高速道路に吸い込まれた。

旅の楽しみのひとつ「駅の雰囲気」を味わうことはかなわず、効率的な駅舎設計のおかげで、市街地をカットして高速道路上を走った。かなりの高みからみわたす、南国的風景を突き進む。

高速道路から一般道に降りると、南国風景は目の高さになり、沿道には養殖池や、アヒルの群、果樹園などが続く。街並みが村落になると、商店が無くなるので買い物。飲み物、果物（ポンカンと柿）、昼食用に少数民族のおばさんが蒸すチマキなどを購入。いつの間にか雄大な山なみの輪郭が現れこれが目指す北大武山だ。

四駆車は舗装した山道を快調に登ると、はては砂利道の林道となり、やがて悪路となった。四駆でない乗用車が何台か駐車している脇をすり抜ける。こちらは四駆車だけのことはあり、波乗り運動で岩角を乗り越えて進む。大丈夫とは思うけれど車体が谷側へ傾くと、尻のあたり



アリサンアイ(台湾名:曲莖馬藍)咲く山道を行く



満員の「檜谷山荘」、通路に寝る人もいる

がムズムズする。11時過ぎに登山口に着く。そこは北大武山から派生する尾根上の鞍部で、ちょっとした広場になっていた。標高約1500m。先着の車が20台ほど、てんでにすき間を見つけて駐車していた。

車から降りると荷物をまとめ、昼食用に買ったチマキを食べる。木の実や鶏肉などが入って1個25台湾元(約90円)、うまい。2つ食べたら満腹になってしまった。

張さんを先頭に出発。しばらくは山腹に沿った常緑樹の路を行く。藍色の小花(アリサンアイという)をたくさん付けた灌木の茂みが続く。日陰の花だが陰気でなく、涼やかだ。

しばしば行き会う人や、追い抜く人がいて、張さんが情報交換や挨拶を交わす。私は「你好!」^{ニイハオ}とかけ声だけ。登山者のいで立ちもいろいろで、スパッツを付けた人や、ゴム長で歩く人もかなりいた。今日の行程は「檜谷山荘(標高2150m)」という山小屋までだから楽だ。ただし無人小屋なので、食料、寝袋などは自分で担ぐ。日本の登山では、日帰りの荷物で歩くことが多く、久しぶりの重荷によたよたする。

岩場の急な登りのあと、巨岩の積み重なりとなり、展望が開ける。深い谷底は霞に隠れ、対峙する痩せた岩尾根は荒々しい。この見晴台から10分ほどで檜谷山荘に到着。14:30。

■ 檜谷山荘

登山口にあって、たくさんの車から予想はしていたが、暗い小屋をのぞくとすでに満員。小屋のつくりは、通路の土間が内部を貫き、その左右が板張りの床。床は、広げた寝袋、横たわる人たちが満杯だった。通路に敷物を広げて場所取りをしている人や、炊事場のベンチを寝床と決めている者もいる。小屋の収容能力は、公称60人だが、野外に寝床を整える人などもいて、総計100人くらいの人と踏んだ。それ以外に大きなテントが幾張りもあり、野営場は夕餉の支度で賑わっていた。

ぼう然としていると、張さんからお知らせ有り。先ほどの見晴台で、顔見知りの山仲間がいたので、頼み込ん

で場所を譲ってもらう取り決めをしたとか。彼らは午前中に早く小屋について、場所を確保した後、見晴台でくつろいでいた。あとから思えば見晴台で、張さんが長めの情報交換をしていると思ったが、必死で頼み込んでいたのかと思うと、経緯を知らなかったといえ申し訳なかった。もちろん、突然の要請を快諾して場所を譲ってくれた彼らにも、感謝感謝である。

彼らは、高雄の山岳会に所属し、今回山が初めてという、女性二人を交えた6人のグループだった。6人組は水道の蛇口が付いた流しのすぐ脇、水汲みが楽な一等席のベンチを確保しており、こちらも招かれて夕餉の時となる。我々の夕食は簡単質素の鰻丼と海草サラダ。このレトルトウナギは台湾産で、日本に渡ってから私らに買われ、再び台湾へ運ばれるという数奇な運命をたどった。高雄の山岳会は本格食材で、野菜を刻んだり、肉を炒めたり、男衆がこまめに準備していた。

陽が傾くと、空気が冷えて寒くなり、夜に備えて着込む。宴が始まると、彼らにあわせてコーリャン酒を少々飲み、彼らの怪しげな日本語と、私のインチキ中国語が飛びかかって、その場を愉しんだ。女性の一人は日本びいき(ハリズー^{ハリズー}?)で片言の日本語をすこし使う。日本のことを手放してほめるので、気恥ずかしかった。

さて、我々の寝る場所は、彼らの場所を少しずつ詰めて入れてもらうものと思っていたがそうでなかった。なんと若手のメンバー二人があっさり寝床を空け、野外で一夜を過ごすというのだ。張さんの説明によると、小屋にいる登山者の多くは「プロ(有資格指導員ということか)」で、かなりの人が「訓練」で野宿するらしい。空いた二つの場所には妻と、張さんが寝る。三人目の私は「男の子」なので、軒下で我慢するよにとのこと。

まだ、あちこちで宴は続いてしたが、我々は寝る体勢になる。妻と張さんは小屋の中、私はコンクリートのタタキに布陣する。外の落ち葉の方が良いかもと思ったが、コンクリートに新聞紙、マットと順に敷き、着ぶくれの体を寝袋に入れた。夜中に風が吹き木々が騒いでいた。(続く)

■ 昔からの伝統を多く残す丹巴

女王谷（現在ギャロンと呼ばれる地域のチベット語の原名“Gyalmorong”の意識）の結婚式は秋の収穫後から春の農作業前迄の間に彼方此方で見られます。中でも異民族との戦争による文化破壊が少なかった丹巴の結婚式は昔からの伝統を多く残しています。

写真はギャロンで最も古い言語形態を残しているとの説が有る旧ゲシザ（昔のギャロン四大領主の1つ）地域における結婚式の様子です。

婚礼の日、花嫁の家には朝早くから親戚達が集まって祝福の言葉と祝金を贈り宴席で祝います。

男性の民族衣装は隣接するカムやアムド等のチベット文化圏のそれに似通っていますが、女性の民族衣装は女王谷独特の艶やかなものです（四姑娘山の有る小金等とはかなり違います）。結婚式に向かう花嫁は、祖先を運んで来たと言われるチョンと呼ばれる大鳳鳥（ガルーダの一種）の絵を描いた札を掲げて歩き、この札を花婿側が用意した宴席の中央に飾ります。花嫁が花婿の家に着いた時、花嫁は実家から持って来た土を門前に設えられた祭壇に撒きます。また花嫁と親戚達は花婿の家の門前に置かれたトウモロコシ等を手に取って撒き、それを跨ぐ仕草をしてから家に入ります。

結婚式の宴席は花嫁側と花婿側の2部に分かれて設けられます。宴会は大なり小なり数日間続けられます。

注：女王谷の言葉はチベット文化の専門家には知られていますが一般的には知られていません（丹巴では観光用に創作された「美人谷」の方が有名です）。

私は専門家ではありませんが、チベット文化学者の山口瑞鳳さんが書かれた下記の著書等で女王谷を知りました。

「東女国と白蘭」, 東洋学報, 第54巻3号, 1971.

「ヤルルン王家の遠祖」, 吐蕃王国成立史研究, 岩波書店, 1983.

▶ 下記のサイトで女王谷の情景を紹介していますので、ご参照下さい。

女王谷 <http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvalley.htm>



花婿の家へ向かう花嫁の親戚達の行列。花嫁の写真は表紙をご覧ください。

● 大川さんの他のホームページはこちら
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>
<http://kawamoto1940.web.fc2.com/>

● 以前のわりいに掲載済みの「写真便り」はこちらにあります
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/ookawasan/essey-title.html>



婚礼の朝、花嫁の家に集まった親戚達。小麦を発酵させた自家製ビール(中央)も置かれています。



花婿の家に設けられた宴席。小麦の種を撒いて厄払います(中央)。



披露宴で花嫁の親族達を労う花婿側の世話人

Wish You All the Best 'わんりい'の皆様 in 2009

Four Girls Mountains N.R. &
Queen Valley in Trans-Himalayas
Kenzo Okawa

'わんりい'中国語勉強会・TEA TIME

四川省の家庭の味「麻婆豆腐」

'わんりい'の仲間に、「中国語勉強会」があります。

現在勉強中の課は、「食べることは楽しいね」といった感じで、いろいろな料理の名前が出てきたり、新婚夫婦が台所で料理を作っている情景が出て来ます。

先日の授業では、西洋人と日本人の男性二人がレストランに行きました。西洋人男性は日本人男性に「今夜は僕がおごるよ。好きなものを注文してね」と次々に料理を勧めます。でも日本人男性はなんだかだとどれも気に入りません。西洋人男性は、ついに業を煮やして、口に合う料理がないなら店を変えようと提案しました。と、なんとその日本の男は、「口に合う料理がないんじゃないかと今日は食欲がないだけなんだ」というのです。

教科書の中の話ながら、なんと失礼な男!と怒ってしまいました。だって、食欲がないなら、何でレストランに行くのよ!!です。中国語勉強会は、夜7時から9時。講座のある日の、私の夕ご飯は帰宅してからです。西洋人男性が提案する料理はどれもこれも美味しそうです。そんな美味しそうな料理を次々断る男を許せないのは私のお腹の事情もあるんでしょうか。

前置きが長くなってしまいましたが、提案される料理に「麻婆豆腐」の名もあります。が、男は「しびれる味は嫌いだね」と剣もほろろにこれも断ってしまいました。

「麻婆豆腐」定食は街中の中華料理店の定番です。男の人たちの好みにあうらしく良く召し上がっています。ところが、この麻婆豆腐の味は、どうも本場四川の麻婆豆腐の味とは全く違うようです。

四川省旅行の旅で手に入れた、真っ赤な花椒(黒い実を取

り除いた山椒の実の皮)の、ちょっと鼻に近づけただけで頭がくらくらっと陶酔するような刺激的な香。四川料理は辛いといわれますが、実は辛さだけではなく、四川省の山椒の格別な香りと、程よく'痺れる'味覚が決め手といわれます。

「麻婆豆腐」は、本場の四川省では家庭ごとに味が違うそうです。実は私は四川省で「麻婆豆腐」を一度も味わったことがないのですが、しかし、成都から日本に留学してきた陳佳さんに教えてもらった「麻婆豆腐」は辛さも程よくはっきりした味が食欲を刺激し今や我が家の定番料理です。どこか手抜きしているのではないかと思うくらい簡単なのですが、家庭料理は本来そんなものでしょう。ちょっと今夜は食欲がないなあと思うとき、試しに作ってみてください。きっと病みつきになることを請け負います。(田井)

【材料】(2人分)

- ◆ 木綿豆腐…1丁、牛ひき肉…50g～100g
- ◆ 豆板醤(あれは郫^{トウモロコシ}県豆板醤)…大匙1 ◆ 葱(微塵切り)…大匙1
- ◆ 豆鼓(なければ八丁味噌で代用)…大匙1 ◆ 片栗粉少々
- ◆ 粉山椒…大匙1(花椒を焦がさないよう空煎りしてすり潰したもの)
- ◆ サラダ油…大匙2 ◆ 醤油…適宜 ◆ 胡麻油 少々

【作り方】

1. 豆腐を2cmの角切りにして茹で、皿などに広げておく。
2. 良く熱した中華鍋に牛ひき肉を入れ、ぱらぱらになるまで空炒りする。その後、サラダ油、微塵切り葱、豆鼓、豆板醤大匙を加えてよく炒める。
3. ゆでた豆腐を加えて、崩さないように混ぜる。火が通ったら、水半カップ～1カップを加えて、醤油を適宜加えて味を調えしばらく煮込む。
4. 仕上げに水溶き片栗粉でまともめ、胡麻油少々と用意の粉山椒をたっぷりかけて供する。

ちょっと前の話ですが、2004年9月にコロombo市内のショッピングセンターの地階食堂街で、和光大学の澁谷先生にバッタリ会ったことから、この話は始まります。

澁谷先生は大学の学生達を連れてフィールドスタディに来ていました。先生と情報交換をしている間に、2,3日前から条件付きでジャフナまで陸路で行けるようになったことを知りました。条件とは、何らかの政府機関のレターを持っていることだそうです。そんなレターなんて持っていませんが、ジャフナに陸路で行けるチャンスは滅多にありません、無性にジャフナまで行ってみたいになりました。

ジャフナについて少し説明をしましょう。ジャフナはスリランカ最北端の都市、という事はインドに最も近い都市でタミール系の住民が多く住んでいます。

歴史上では紀元前から、17世紀初頭にポルトガルによってジャフナ王国が滅ばされるまでインドの支配下にありました。これまでも何度か書きましたが、シンハラ系の王朝はインドからの侵攻によってアヌラダプーラから南へと遷都を繰り返しました。おそらく、ジャフナは侵攻のための橋頭堡だったのでしょう。街の雰囲気も、売られている商品もインド製が多く、コロomboとはかなり街の様子が異なります。スリランカには仏教徒が多いのですが、ジャフナでは圧倒的にヒンドゥー教徒が多く、カンダスワミ寺院の大祭はタミール系住民にとっての最大の祭りとして有名です。ジャフナから対岸のインドまでは約100kmほどで以前はフェリーが運航されていましたが、現在は運航を停止しています。

2004年当時は、ノルウェイ政府の仲介でスリランカ政府とLTTE(注)は休戦協議に入ったばかりの時期だったので、和平日ムードが漂っていました。そのほんの少し前までは、政府軍が死守するジャフナを巡って激しい攻防戦が続き、政府軍とLTTEによる支配が交互に入れ替わり、双方の兵士と民間人に多くの犠牲者が出ていました。新聞紙上では連日、政府側が発表する戦況と戦死者数が発表されて士気を鼓舞していました。

政府発表とは別に色々な情報や噂が巷には溢れていて、大部分は政府軍側が不利だと云うものでした。この頃は、アヌラダプーラから30kmほど北上したバブニヤの町から、ジャフナ直前の町であるパライまでの約150km間はLTTEの実質的な支配地域で、LTTEの行政機関によって統治され、国道9号線は遮断されていました。

ジャフナへは空路か海路で行けますが、どちらもLTTE側の攻撃によって危険なルートでした。このような状況下で、しかも自分の目でLTTEの支配地域を地上から直

接見る事の出来るチャンスを見逃す事なんて出来る訳がありません。

澁谷先生と別れると直ぐに、スリランカ人の友人達にジャフナ行きの相談を持ちかけて見ました。友人によれば、そんなレターは無くても何とかなるだろう、お前は何処から見ても外国人だし、立派な肩書きもあるから自分達と一緒に行けば何とかなるというのです。

僕は日本のパスポートは持っているものの、立派な肩書きとはいっても日本スリランカ文化交流協会の副会長の名刺を持っているだけで、正規のIDカードはおろか何らかの援助計画プロポーザルや会のパンフレットすら持っていないのに大丈夫かと不安になりました。

友人の一人はコロombo市内でドイツ某スポーツ用品店の店長をしているカルナラトネ君で彼は少し日本語が話せるので通訳とコーディネーター役、もう一人のクルネガラで日本製中古バスを使って路線バス会社をやっているチャミンドラ君が運転手役という配役を直ぐに決めてしまいました。

こんな簡単に計画を進めて大丈夫だろうか、政府軍とLTTEのセキュリティチェックをパス出来るのだろうか、パス出来なくて捕まったらどうなるのだろうか、そもそも相談した相手が拙かったのではないかと色々心配になってきました。

僕の杞憂をよそに友人達は気楽なスリランカ人です、何の心配も無い様です。彼達もこのチャンスにLTTEの支配地域を見たいなのでしょう。普段と違って、驚くほど迅速に計画を建てていきます。2日後に出発する計画が直ぐに出来上がりました。カルナラトネの親戚がジャフナに駐留している政府軍幹部なので、その人を頼って行くという計画です。

ところが、こちらからの連絡手段がありません。現地に着いてから政府軍のキャンプ地で捜すというのです。しかも、ホテル代わりにキャンプに泊めてもらうというではありませんか。いくら親戚関係が濃厚なスリランカでも、緊迫した状況にあるジャフナに連絡もしないで出かけて行って、政府軍のキャンプに泊めてもらうなんて可能なのでしょうか。ここいら辺の計画の杜撰さがとても不安になるところです。

案の定、計画通りには進まずLTTEの支配地内で、しかもLTTEのキャンプに泊まった最初の日本人になってしまうのですが、その顛末は次回書く事にします。

注: タミール・イーラム解放の虎・The Liberation Tigers of Tamil Eelam) タミール独立を標榜し、スリランカ政府に対する武力闘争を指導している。

人類は衝撃的なニュースを受け取った。

賞賛、喜び、歓声、幸福、涙をもって第44代アメリカ大統領としてバラク・オバマを迎える。彼は地球上、最も影響力のある人間になろうとしている。4年に一度の大統領選挙がどうしてこんなにも興奮と驚きをもたらすのか？この男は何者だろうか？どうしてこんなにも世界は興奮しているのだろうか？

まず彼は、今まで当選してきたどの大統領とも違って、いる。スワヒリ語の彼の「barak」という名前が示すように、彼は「祝福された」人なのである。ケニア人の父親とアメリカ人の母親から生まれたその息子は世界の価値観を変えたのだ。ミドルネームにイスラム教のフセインという名を持つその黒人男性がついにアメリカの大統領になるのだ。

すばらしく知的で、情報にたけ、抜群の発言力を持つ彼。彼は、すべての世代の老若男女の心を動かした。彼の功績はいつまでも人々の記憶に残る歴史的なものだ。

たった一世紀半前までのアメリカでは、オバマのような黒人たちは奴隷であったことを忘れるべきではない。奴隷制度は人類史上最も恥ずべきものがある。人間が、物のように所有され、扱われ、取引され、動物よりも劣悪に扱われた歴史。例えば、あなたが市場で、子どもや家族や全ての知人たちから引き離して一人の人間を買ったとする。あなたはその人間に対して生かすも殺すも思いのままの権利を持つことができたのだ。

たった40年前、黒人はアメリカをはじめ、どこにいても市民権はなかった。それは選挙権がない、人種を超えた結婚ができない、よい学校に通うこともよい病院に入ることもできず、よい仕事にも就けず、そして法的な権利を持たないということである。

オバマの選挙結果がこれまでの選挙と如何に違っているのか。彼が勝利宣言の演説をしたとき、黒人の歴史を思い、選挙がもたらした歴史的意義に人々は喜びの涙を流した。しかも、オバマの勝利はアメリカに住む黒人たちだけのものではない。我々すべてにとって勝利なのだ。

将来首相になりたいと願う日本の子供の勝利である。政治家出身でも、資産家出身でなくとも、志を持ち、一生懸命に学び働き、夢の実現に向けて努力すれば可能なのだ。

能力もあって弁護士や医者になりたいと願う子供を持つシングルマザーの勝利である。彼女たちは一生懸命に働き、子供たちに夢見ていることは叶うと励ますだろう。

両親から見放された孤児院の孤児たちの勝利である。望むなら大統領になれるかもしれないのだ。自殺寸前の絶望的状况にある人の勝利である。すばらしい明日があるのだから捨て身になって明るく前向きに希望を持って困難を乗り越えよう。不利を有利へと変えていくのだ。希望を失い、

自分さえも信じられないという会社員の勝利である。自身の能力を未来の人生設計のために100%生かすのだ。

オバマの勝利は、挑戦する私たちすべての勝利だ。よりよい未来を夢見る私たち。子どもたち、友達そして家族について思い悩む我々。我々は、たゆまず働き、自分の能力や才能を信じ、夢を持って前進すれば全ての困難を乗り越え、なそうと思ったことをやり遂げることができるのだ。

オバマ次期大統領が、我々誰もが考えるよりももっとずっと厳しい状況を乗り越えることができたのだから私たちにも出来るはずである。

私個人にとっても、彼の勝利は特別であった。同じ祖先を持つケニア人として、この選挙を見届けられたのはなんと幸運だろう。どんな教師が教えるより、どんな牧師が説教するより、世界中の不利な立場に置かれている人々を励ますだろう。

それ以上に、成功できないのを能力の所為にするかもしれない二重国籍の我が子供たちを励ますだろう。能力は肌の色で決まるのではなくどんな人間なのかで決められるのだ。私は、オバマが彼の挑戦的な生い立ちを乗り越えたのだから、子供たちも才能を開発し成功できないはずはないと繰り返し言うだろう。

私たちが挑戦しさえすれば、基本的に夢は叶うのだ。私たちはよりよい世界に変えることが出来る。私たちは政府に対して影響を与えることが出来る。私たちは社会的弱者で、支援を必要としている人たちを支え得るのだ。私たちは自分の能力に応じて、地域を向上させてゆく努力や活動によって、経済的支援だけでなく道徳的にも応援することが出来る。一人の生活を変えるだけではなく世界に多くの変化をもたらせることに私たちは誇りも持とう。それは、私たちの義務なのだ。

個人的に、私は今までにないくらいこの選挙に励まされている。私は、ケニアを含むアフリカを助けるための更なる努力を惜しまない。

子どもたちが飢えて死んだり、女性たちが予防可能な病気で死んだり、男たちが自分自身理解もしていないのに、資源を争う戦争で死んだりする理由はないのだ。

世界には人類の生活を向上させる能力も、豊かな資源もあるのだ。私は、すべての人に変化と希望をもたらしたい。そう、我々ができるのだ。

私は、ケニアが必要とする変化をもたらす活動に従事し、誠実な指導力を持って社会に奉仕する者になることを約束しこれを寄稿する。

(訳文：竹田悦子)

*原文(英語)は「わんりい」ホームページ、「アフリカとの出会い」に掲載します。

なんだよ！なんだよ！亜丁ってこんなところだったの!? あまりに強欲と思える宿の女将への反発心から沖古寺を飛び出してきた私は、身体の前足をザックに挟まれた格好で荷物に埋もれながら、半ばヤケクソになってズンズン歩いていた。天国のように美しい自然の懐に抱かれた秘密の桃源郷、素朴で穏やかなチベット族の人たちとの和やかな交流。長い道のりを再訪の喜びと期待に胸を膨らませてやってきた私が、心におもい描いていたそんな甘い亜丁のイメージはあっさり打ち砕かれてしまっていた。

公共の輸送手段すらない僻地の山奥にありながら、その自然の美しさに惹かれて集まってくる旅行者を相手に、すっかり観光ずれした様子の村人達の姿……。人に連れられて全てを他人に任せていた三年前の旅では知りえなかった、この土地の現実の姿を到着早々見せ付けられた私は、懐かしい友人と思っていた人間からいきなり罵声を浴びせられたような気分になっていた。

「あつま(頭)、くるよねえ〜!!」

表面上はことさらに元気に振舞いわざと勢いよく歩きながらも、つい先ほどまで喜びに弾んでいた胸の中には、やり場のない怒りと失望と悲しみが重苦しく渦を巻いていた。

こんなに美しい土地なのに……。何故? ……

前夜、稻城の温泉宿で、私は亜丁がどんなに美しい場所なのか熱心にアーロン達に語ったものだ。海子が大好きだというウィンは目を輝かせ、自然を愛するアーロンもシャオチンも亜丁来訪をとっても楽しみにやってきたのだ。

みんなもガッカリしてるんだろうな……。泣きたいような気分だったが、今ここでその事について深くは考えたくない。亜丁の旅はまだ始まったばかりだし、前から見ても後ろから見てもザックに手足が生えた様な私の姿は、シリアスになるには滑稽すぎる。洛絨牛場ルオロンの方向から馬に跨り折り返してくる中国人の旅行者達が、みんな私の姿を見ると指差して笑っていた。

「小姐、あんた力持ちだねえ〜!!」

馬上で笑いながら呆れた様子で声をかけてくる旅行者達に、私はことさらに明るく振舞い「そうよ！私はとっても強い女なの！」と腕を振り上げ、何度も力瘤を作って見せているうちに、だんだん自分でもこの状況が可笑しくなってきた。先ほどの重苦しい気分は少しずつ和らいできた。

まったく私ったら何をやっているのだろう。皆が軽装で馬に跨り気楽に観光旅行している場所で意地になって大荷物を担いで歩き、今日がこの先どうなるのか、何処に泊まれるのかも判らない。思いがけない亜丁の住民たちの洗

礼には大きく失望を感じたが、それだけが亜丁のすべてでは無いはずだ。とにかく私はここまで来ているのだ。嫌な出来事をグジグジ考えているよりはこれからの旅の展開に期待したい。

出発前はとて一人で持ち運ぶのは難しいだろうと思われていた荷物も、怒りの勢いに任せて担いでみれば案外担げるものだった。私は自分で思っていた以上に逞しかったらしい。結局こうなるなら最初からポーターなんて雇わなければよかった。それならさっきのような嫌な思いもしないで済んだかもしれないのに。

多少のお金をケチって意地を張り苦労しているのも馬鹿らしいが、そんなバカバカしさが私の旅の持ち味なのはいつもの事だ。自分のこの逞しさがどこか誇らしくも感じられていた。この時の私は軽装で楽々通り過ぎて行く馬上の旅行者達を横目で見ながら、心の中で密かに「フン！私はあんた達とは違うのよ」という何の根拠もなく、誰も羨ましくない優越感のようなものもコソコソ感じていたが、実はこの旅の始まりである四姑娘山での私は、ポーターに荷物を持たせ自分は馬に跨っていたのだ。

あの時はやや年かきの母や母の友人一同との登山ツアーのような形をとっていた旅行だったため、自ら選択した状況では無いと言い訳できない事も無かったが、事実は事実であり人間の気持ちなんてその時々で変化するまったくいい加減なものなのだ。

それまで一緒に歩いていたアーロン達は、私が大丈夫そうなのを見届けるともうそれには気を留めることも無く、あちこちに移動しながら亜丁の湿原の美しさをカメラで写しまくり始めた。水のある風景が大好きだというウィンは湿原の中を流れる綺麗な小川を見ると、「あの水に触りたい」と道から低い崖を下って湿原に降りて行き、それぞれがバラバラに歩き始めていた。みんなは自由に亜丁の自然を満喫していたが、私は動きまわるには荷物が重すぎて、ただ黙々と荷物を担いで歩くだけだ。

ゆっくりと移り変わっていく風景はどれも見覚えがありとても懐かしい。その中でも特に印象深かった、山全体にゴツゴツと尖った岩が天にむかってぎっしりと聳えている異様な姿の岩山が近づいてきた。まるで鬼の住処のようだ。昔話に出てくる鬼ヶ島ってきつとこんなじゃ…と思えてくるような荒々しい山容だ。長年気にはなりつつもまだ実際に訪れる機会に恵まれていない、中国雲南省の石林とはこの山の風景がもっと範囲を広げた様な感じなのではないだろうか。

道の脇に立っていた道標に書かれていた名称は忘れて

しまったが、この山にはたしか日本語でいう「五百羅漢」のような意味合いの名前が付けられていた。岩山の上にぎっしりと聳えている石柱を僧侶の集まっている様子に見立てているのだろう。普通ならこの岩山だけでも観光名所になってしまえるくらいの見ごたえと存在感、その不思議な山容が形成されるに至るまでの地質学的な興味など十分な魅力にあふれていて、変った形の石や岩を眺めるのが好きな私は、三年前も今回もこの岩山には大いに興味が惹かれたが、周りにいる旅行者達は誰も問題にしていない様子だ。

帰国した後にそれとなくインターネットでも調べてみたが、亜丁旅行記を書いている人の中にもこの岩山について触れている人はいないようだった。雲南省といえば誰もが石林、石林と騒いで一大観光地になっているというのに、亜丁は雪山ばかりがクローズアップされて、この鬼ヶ島山が全く注目されていないのは岩山好きの私としては大変遺憾だ。

風景を懐かしみながら緩やかな上り坂を一步一步踏みしめゆっくり歩いていたが、次第に前後に抱えている荷物の重さが肩に食い込みはじめ、私の歩く速度は徐々にスピードが落ちてきていた。最初のうちは怒りのエネルギーをパワーに代えてズンズン歩いていたのだが、その怒りが静まってしまうと、ひたすら荷物の重さが身にしみてくる。

いつの間にかアーロン達はずっと先へ行ってしまう、後ろからはウィンが追いついてきた。

ウィンはそう体力がある方ではないらしく、軽装で歩いているながらもやはり大分疲れているようだった。考えてみれば今朝は3時半に起床して、食事は早朝、亜丁の入り口で小さなお椀に麺を一杯食べただけなのだ。既に時刻は午後をだいぶ回っていて、疲れてくるのも無理はない。それに加えて高地では下界に比べて体力の消耗が激しいのだ。

牛場までの道のりも中盤を過ぎてからは、ウィンと二人で10分歩いては少し休み、15分歩いては腰掛けて休憩しながらノロノロと歩いていた。

高度4000メートルの土地では既に夏も終わりの季節になっているとはいえ、一応まだ8月だ。日中はお天気さえ良ければやっぱり暑い。下界より太陽に近い分だけ、尚更暑いような気がしてくる。太陽がジリジリと照りつける中、重い荷物を背中に背負いながら胸にも抱いて、ひたすら歯を食いしばり黙々と歩いた。洛絨牛場まではもうそう遠くはない筈だが、なにしろ二人の歩みが遅いのでその距離はなかなか縮まらないのだ。

ふう～

道の脇に腰掛けるのにちょうど手ごろな岩があり、私は

胸にかけていたザックを降ろすと、背負った荷物はそのままだに岩の上に腰掛けた。私が腰掛ければ背中へのザックは自然と岩の上に置かれた状態になるため重さは感じなくなるし、ザックをわざわざ肩から外して下ろすのも面倒なほどグッタリしていた。

私達の目の前をガラガラ、シャンシャンとカウベルや鈴の派手な音を立てながら旅行者を乗せた騎馬隊が通り過ぎて行く。馬1頭に対して1人付き添っている馬子達は、まだ小さい子供から大人からまで年齢性別さまざまだ。自然の厳しい亜丁の観光シーズンはそう長くはないのだろう。稼ぎ時の間は家族総出で借り出されているのに違いない。私は水を飲みながら、目の前を通り過ぎていく騎馬隊の団をボンヤリ眺めていた。疲れのあまり、頭の中はカラっぽになっていた。

そんな時である。騎馬隊に付き添って歩いている馬子達の中に、少年と呼ぶには少し大人になりすぎているような年頃の青年が混じっていたのがフと目に入った。何気なく青年の横顔に目をやった私は、その瞬間頭の中にピリッと電気が走ったような気がして、何故だか急に彼から目が離せなくなってしまったのだ。

「……………」

食い入るように彼の横顔を見つめている私の視線に気付いた青年はキョトンとすると、不思議そうな顔をして私を見返し「何？」と言いたげな表情で小首を傾げて見せたが、私は凍りついたようにジッと彼の顔を凝視し続けていた。

騎馬隊の団はにぎやかな音をたて、ゆっくりと私の前を通り過ぎていく。落ち着かない様子で何度か私の方に目線を向けていた青年も私の前を通り過ぎて行った。彼がこちらに背を向けて歩き去って行こうとしても、私は青年の姿から目をそらすことが出来ずにいると、やはり何故自分が見つめられていたのか気になっていたらしい青年が再びチラッと後ろを振り返った。

その瞬間私は自分でも気付かないうちに大声を出していた。

「ちょっと待って!!!」

青年はビックリしたように立ち止まるとこちらを振り向いた。

「あなた、ちょっとこっちに来て!! あなたの名前は何!?!」

この時の私はきつととっても怖い顔をしていたに違いない。青年は戸惑ったような表情を浮かべながら2、3歩私の方に近づいてくると、自分の名前を答えようとしながら私の顔を見つめ、次の瞬間ハッとした様子で

「……アッ!!」と叫んだのだった。

(続く)

広開土王(好太王)の事跡を記した石碑が、現中国吉林省集安市にある。

西暦414年、広開土王の子、高句麗20代国王長寿王によって建立された高さ6.39メートル、四面に漢隸体の漢文千七百餘字を刻んである。碑文は三段から構成され、一段目は高句麗の開国伝承と建碑の由来、二段目は王の業績が書かれている。三段目は王が征服した城や村の数など。風化でいくつかの文字が欠け、日本、韓国、北朝鮮そして中国の研究者によって意見の対立や解釈の違いが生まれているという。5世紀の東アジアの貴重な歴史的記録が多く謎と疑問を生み出している。

2004年、蘇州で開催されたユネスコの会議で高句麗の城址と王墓、貴族墓と共に世界文化遺産に登録され、風化防止の防弾ガラスを張り巡らした東屋の中に鎮座している。

桓仁県から通化を経由して、集安市に向かう私とEを乗せた、瀋陽の遼寧省国際旅行社手配のワゴン車は、五女山山城を後にする時、どうしても渡らねばならぬ橋を、工事中という理由で、何台も待ちぼうけを食っている様々な車の後部に付けた。が、ベテランドライバーの姚さんの機知に富んだアイデアで、この窮地を潜り抜けることが出来た。夕闇が立ち込める頃、目的地に到着。集安賓館で荷を解いた。集安市の南東から西側には鴨緑江が流れ朝鮮民主主義人民共和国(以下北朝鮮と記す)との国境になっている。

集安は西暦209年(日本人研究者による)から427年、平壤城へ遷都するまで、高句麗の第二の都となった。そして広開土王が即位した391年から高句麗史上の最盛期を迎えるのだった。

高句麗19代国王は、建国から滅亡までの705年の歴史のうち、最も領土をひろげたその功績から諡号を^{おくりな}広開土王と称される。生前の名は永楽太王、幼名^{タムドク}談徳。朝鮮半島では3分の2を、北西では契丹に遠征、北東では^{シユクシン}肅慎へ、北では^{ヒガシブヨ}東扶余を滅ぼすなど四方へ(現、中国三省)国土を広げていったのだ。

現在の集安市は人口23万の小さな地方都市だ。高句麗時代、空前の繁栄を謳歌した都であったとは、とても思えない。私たちが宿泊している集安賓館からまっすぐに南へ歩けばかつての平城“国内城”の跡だ。集合住宅の間に切り取られた石垣が残っている、いや石垣しか残っていないのだ。

石垣の間を通り、さらに南に行けば“高句麗遺址公園”がある。公園は市民の憩いの場となっていて美しく整備

され、巨大な石のオブジェ(国内城に使われていた石か)や花壇と小さな小川が造られ日陰のベンチには人々が三々五々涼んでいる。

発掘されたものは集安博物館にあるのかと期待したのだが、残念ながら休館中であつた。遙か昔、広開土王が凱旋し、歓喜の聲に迎えられくぐったであろう城門跡は石垣から長方形に飛び出した“馬面”と呼ばれる石組みで、東西に各1箇所ずつみられるという。

文献によると「城門は6ヶ所」あつたという。また、西の城外からは城へと伸びる水道のあとも発掘されている。国内城の西の城壁は比較的整備され、すぐ後方に現代人の住む集合住宅が連なっている。2004年夏に発行された「中国文化遺産」という画報の中に発掘中の国内城の写真があるが、残念ながら、私たちが訪れた2008年7月には石垣と馬面の一部を見ることができただけだつた。

国内城からさらに南に歩くと鴨緑江にぶつかる。モーターボートに乗り込み、お隣り北朝鮮の緑深い村(?)を垣間見る……。木々の間に黒衣の村人の労働している姿が見えた。

私とEは、ドライバーの姚さんが勧める“高句麗遺跡観覧チケット”のセット100元は高値だと、ちょっと渋ったがそれはとんでもない誤解であつた。集安以後めぐった観光地の門票(入場料)だけでもびっくりの高値!このセットは夜の高句麗民族舞踏観劇までも付いていて、驚くほどの安値であつたのだ。

午後は、山城“丸都山城”へ行つた。夏の陽射しに焼かれて、ぬるくなったミネラルウォーターを握りしめる手にも汗がにじむ。小学5、6年生と思しき女の子のボランティアが説明してくれると言って我らの先頭に立った。見回すと同じブルーのシャツを着た小学生の集団が、夏休みのテーマかノルマか宿題か、観光客を案内している。髪をおさげにした、痩せて小さなひざ小僧を黒いショートパンツから覗かしている可愛い子は、要所要所ではつきりと、はきはきとした母国語で案内してくれた。

丸都山城は国内城から北へ2.5キロ、山中に位置している。起伏に富み、最高海拔625メートル、東西北面は山に囲まれ南面は比較的^{オウジョウ}低く、瓮城と呼ばれる門になっていて国内城と向かい合っている。鴨緑江へと流れる支流通溝河が二つの城を結び、丸都城の中には清水が湧き出て、いざ戦の時には国内城から人々が逃げ込み籠城に耐えたのだろう。

現在宮殿跡を発掘中で遠目に働く人々が見えた。城壁も高句麗独特の石の凸凹をとり入れた築城形式を凝らし

ている。小学女兒の案内で瞭望台へ登った。勿論、石垣しか残っておらず、V字型に切り取られた場所は、はたしてどんな役目があったのか、私の拙い中国語では理解できず、おそらくここに登って国内城と狼煙でやりとりしたのであろうか・・・。

小学女兒に別れを告げ、丸都山城跡を出て“山城下貴族墓”へ向かった。広々とした緑の平原に石を積み上げた古墳の数々がみえる。兄墓、弟墓、折天井墓、亀甲墓等々、中国人民国務院が記した小さな説明用の石碑が古墳のそばに建ててある。古墳群の向こう、遙か四方を山々が囲み、その上を1800年前と変わらぬ青空が広がっている。

夜はEと高句麗舞踏を観劇に行った。観衆より演技者の方がはるかに多い。朱蒙の伝説に始まり、現代舞踏と民族的な踊り、バレエやモダンと盛りだくさんな1時間のショーであった。

翌日も晴天、夏の青空に白い雲・・・、集安駅近くに点在する遺跡へと姚さんをお願いし、まず市街地の北東6キ口、龍山麓にある“將軍墳”へいった。高句麗古墳群の中で最も雄大で有名、東方金字塔とも称され、以前は朱蒙チュモンの墓では？と思われていたが研究が進み、5世紀のものと断定。広開土王かその子長寿王の古墳では・・・と言われているが、盗掘によって手がかりが何も残されていない。中国人研究者によると好太王碑の西側に太王陵と名づけた古墳があるがそれこそが広開土王の墓という。

「好太王碑」と書かれた前述の建物の中にそれはあった。大きい！中には入れないと聞いていたが、観光客がぞろぞろ入っている。石碑に触った。夏の暑さにその巨石も熱い。字は殆ど判読できない。漢字であることだけがわかる。ここ東北地方は清国(金)の太祖ヌルハチの出身地として長く聖地であるとされ、200年に渡り人が入ることを禁じた。その為に高句麗の王墓、貴族墓は盗掘され尽くし、好太王碑もまた、葛が何重にも巻きつき、風化はげしく今日の論争の一因になったのだ。

19代高句麗国王を描いた韓国ドラマ「太王四神記」は日本でもNHKが放映した。主演のペ・ヨンジュンが手術するほどの怪我を押して撮り終え、少年時代の談徳をユ・スンホ、そして演技に磨きがかかり勇壮でもあり艶っぽくもある青年談徳役のペ・ヨンジュンに日本のアジュンマ(おばさん達)はさぞ歓喜の涙を流したであろう・・・。

このドラマのテーマがまた良かった。「征服王」と言われてきた広開土王を「平和主義者」ととらえ、台詞の一つ一つにも深い意味をもたせた。度胸と叡智で危機を潜り抜け、命の尊さを説き、家臣に愛される談徳。日本の高松塚古墳、キトラ古墳にみられる四神や星宿の壁画が集

安の貴族墓からも発見されている。その四神たちが活躍するのもこのドラマのみどころになっていた。

集安を去る日、町の西、鴨緑江に架かる国境大橋の真ん中まで行こうとしたが、国境警備の解放軍に何故か拒絶されてしまった。さらに姚さんに我がままを言って地図に載っている単独の高句麗古墳に連れて行ってもらった。

下解放墓区、環紋墓、長川墓群、西瓜畑の中の冉牟墓、町の東の千秋墓、西大墓、訪ね歩いた七星山墓等々、なんと多くの古墳の数々。北朝鮮の平壤付近にも貴重な壁画の古墳群があるという。高句麗という国の底知れぬ偉大さを目の当たりにした集安での3日間であった。

【京劇わくわく講座】

アンケート・講座関連についての集計 回収60枚/137枚

- 1 京劇を見たことがありますか
イ ある 34(1回14 2、3回11 4回以上9)
ロ ない 26
- 2 京劇の講座に参加したことがありますか
イ ある 20 ロ ない 40
- 3 今日の講座は今後の京劇鑑賞に役立つと思いますか
イ とても役立つ 41 ロ 役立つ 19
ハ まあまあ 0
- 4 機会があれば京劇を見たいと思いますか
イ 是非みたい 34 ロ 見たい 25
ハ いいえ 0 ニ 無回答 1

- ▶とても楽しく拝見しました。お二人の変身振りに感嘆…
- ▶なかなか劇以外のことでこんなに細かく説明をしていた
だけ機会はありません。とても良かったです。
- ▶素晴らしい企画で本当に楽しかったです。
- ▶お二人の化粧がとても興味深く、参加して本当に楽し
かった。最後の京劇も流石と思いました。
- ▶……最後の演舞は圧巻、素晴らしい。動きがまるでバレ
ーのよう、衣装の美しさに感動。
- ▶大変、大変素晴らしかったです。化粧から着付けなど細
かく見せて頂いて大感激です。……
- ▶今後の京劇鑑賞に非常に大きな影響をもたらす、実に中
身の濃い学習ができました。お二人の熱演に感謝します。
- ▶お二人の講師のお人柄がにじみ出ている、本当にわくわ
くした講座でした。嬉しい楽しい2時間でした。
- ▶楽屋に入っているようでした。今後京劇を見たいです。
- ▶張飛と馬超の一騎打ちがよかった。講座も面白かった。
- ▶素晴らしかった。一層京劇に関心が持てるようになった。
- ▶楽しくためになる講座でした。説明と具体例とがいいバ
ランスでした。メイクの技術に脱帽です。演舞素晴らし
かった。

【'わんりい'活動報告】

京劇わくわく講座 2008年12月12日(金)
於：町田市民フォーラム 3F ホール

武生役の張紹成氏と花臉役の殷秋瑞氏、お二人の磨きぬかれた見事な立ち回りは、息を呑む美しさでした。

京劇から始まった'わんりい'の活動でした。まちだ市民大学HATSからの呼びかけにより、小さな講座ながら10年近い年月を経て再び京劇に関わる催しを開催でき感無量です。まちだ市民大学HATSに心からのお礼を申し上げますと共に、張紹成氏、殷秋瑞氏の両氏が、参加の皆様とかつて共に活動を続けた、古い友人'わんりい'のために精一杯心を尽してくださったことに深くお礼を申し上げます。

参加者の半数近くの方が寄せてくださったアンケートから、講座の素晴らしさへの感動の声が聞こえるようです。参加人数は、TBS取材スタッフとケーブルテレビの取材者などを加えて150名そこそこで、満席188席には至りませんでした。珠玉のような催しができたことに満足を覚えています。(田井)

旧「京劇を楽しむ講座」メンバーの想い 今川郁子

'わんりい'が活動を始めたころは、異文化への憧れが強く、何でも知りたい好奇心旺盛のメンバー達によって、京劇に関わる活発な活動をしていました。当時の活動の中心にいた張紹成氏、殷秋瑞氏を講師として招いた今回の講座は、両氏の、来日以来の歳月の経過を感じる人間的成長も与って、小規模ながら自画自賛したいような成果をあげたのではないかと思います。

この日の講座は参加された皆様から好評を頂きましたが、お二人の熱のこもった演技を見ながら、長い付き合いのある'わんりい'メンバーとしてもっと観客を動員し、いいお芝居をさせてあげたいと深く願ったことでした。

古いものを全て打ち壊そうと試みた文革の時代は、京劇も変革を余儀なくされ、伝統京劇の名優たちの受難の



講座の開始を待つ会場、舞台には京劇グッズが並べられている
撮影：河本義宣

時代でした。しかし、毛沢東自身が密かに伝統京劇を楽しむほどの愛好者だったこともあり、伝統京劇はかすかな命脈を保ちました。

文革後の改革開放路線のもと様々な大衆文化が勃興し、中国は、京劇を中国国劇として位置づけ、京劇再興のために国立戯曲学院、続いて国立戯曲大学を設立して俳優の育成に励みました。しかし、中国の若者に問えば、「京劇？京劇は年寄りの楽しむものではないか？」という返事が戻ってくるといわれる時代です。

今回の講座のような催しを中国の市民会館などで催すのはどうでしょう。中国の皆さんも十分楽しめるのではないのでしょうか。

京劇の美しい雲手も様々な国に伝わる手の動きも、シンボルするものが分かって初めて楽しめるといえるでしょう。日中ともどもに京劇ファンを育てる地道な活動として提案したいと思います。

「京劇わくわく講座」に参加して 為我井輝忠

これまで京劇は中国と日本において20回くらいは見ています。中国に行くたびに北京をはじめとして上海、大連で見たことがあり、この面白さに引き付けられていました。しかし、化粧や舞台衣装の着付けといった舞台裏を見るのは今回が初めてです。京劇の舞台が少しずつ出来上がっていく様を見るのは、実際の舞台を見るのと同じくらいに興味を感じました。

今回、日本で活躍している二人の俳優、張紹成さんと殷秋瑞さんによるお話と実際の立ち回りを見て、今まで感じていた疑問や分からなかったところが良く分かりました。

今後実際の京劇の公演があるといいですね。是非企画してみてください。このようなわくわく講座が今後とも続くことを希望します。



京劇俳優は自分で化粧念する

撮影：百井謙子

文化交流の輪は民衆の中から

京劇俳優 張紹成

12月12日町田市民フォーラムで“わんりい”主催の「わくわく京劇講座」で講師を務めさせて頂きました。‘わんりい’の皆様のおかげで無事終了することができました。有難うございました。お客様のアンケートの感想を拝見し、大変喜んで頂けたようでホッといたしました。又、久しぶりに‘わんりい’の皆様とお会いできて何より嬉しく存じました!!!

つるかわ中国文化研究サークルから“わんりい”にお名前を変えましたが、以前より更なる交流の輪が広がっていることを心から敬服いたします。

京劇は中国伝統文化芸術の集大成ですのでいろんな角度から楽しんでいただけたらと思いますが、京劇を理解するにはこのような講座が必要です。そして国と国、国を超えて人と人が理解しあう為には、文化の交流は欠かせない活動だと思えます。勿論それぞれの思いや価値観の違いがあるのですが、沢山の活動を通して最終的に良い結果を得られれば何よりではないかと思えます。

国としてのスローガンも必要ですが、国と国との政治的で派手な交流より、“わんりい”のような素晴らしい会が



講座が終わって花束を手に

撮影：百井謙子

沢山できて市民レベルでの交流の輪が広がれば、さらに友好の根を深くおろせるような気がします。本当の意味での交流は民衆の中からと私は信じております。

最後に会の皆様のご健康と“わんりい”の交流の輪で世界をつなぐ新しい万里の長城を!!! と心から応援させていただきます。

皆様に楽しんでいただける活動を

京劇俳優 殷秋瑞

公演を成功させるのは難しいものです。講座(特に有料での)は尚難しいものがあります。が、今回の講座は成功だったといえるでしょう。先ず、年末の大変お忙しい中、貴重な時間を割いてご来場下さいました皆様に深く感謝申し上げます。そして古い友人である‘わんりい’の皆様に心からの感謝を申し上げます。本当にお疲れ様でした。

日本に来て早くも20年近くなり、公演や講座など数多くいたしました。十何年か前の講座を思い出しますと、言葉の問題があつて自分が話したい、紹介したいと思うことをきちんと表現できませんでした。恐らく当時は、講座参加の皆様は良く分からないながら凡その理解をして下さったのではないのでしょうか。観衆や聴衆の皆様が本当に京劇についての知識を理解したり、京劇芸術を味わい楽しみ満足されて帰られたのかずっと心に掛かっていることです。

十何年か経ての今回の講座では、ご来場の皆様は笑い声を上げながら中国文化の精華ともいえる京劇の歴史や知識を知って頂け大変嬉しく満足に思っております。

今後ともご参加の皆様がどう受け止めるかに心を配って、気軽で楽しい京劇芸術の鑑賞の手引きをしようと思っております。皆様、どうぞよろしく声援をお願いします。



衣装を着けていよいよ張飛が完成する

撮影：百井謙子



京劇ならではの華麗で豪華な立ち回りは修練が物をいう

撮影：百井謙子

日中友好会館・新春の催し

刺繍でつづる母の愛 — 少数民族の刺繍工芸展

2009年1月23日(金)～2月22日 10:00～17:00

(金曜日のみ、19:00まで開館 休館日:火曜日) 【入場無料】

於:日中友好会館・美術館

〒112-0004 文京区後楽1-5-3

☎:03-3815-5085

アクセス:

1.都営大江戸線・飯田橋C3出口より
徒歩約1分

2.JR・地下鉄・飯田橋駅より徒歩7分

3.丸ノ内線・後楽園駅より徒歩10分

中国西南部に住む少数民族の女性達は、幼い頃から母親や祖母に刺繍を習い始めます。特に、母親が我が子のために作る服飾には、子どもの幸せを祈願する模様が一針一針縫いこまれているのを感じます。中国美術館の収蔵品から刺繍工芸約80点を選びすぐり展示します。

主催:財団法人日中友好会館、中国美術館

協力:文化学園服飾博物館

後援:中国大使館、(社)日中友好協会 他



龍紋女兒襟飾り(トン族)



刺繍でつづる母の愛

—少数民族の刺繍工芸—

▶作品解説とミャオ族の女性による刺繍実演
2009年1月24日(土)14:00～申込み不要

▶同時開催【中国を見る三つの眼展】

少数民族に魅せられた写真家と画家の3人展

2月7日(土)～2月17日(火)10:00～17:00

於:日中友好会館・大ホール

アーティストトーク:2月7日(土)13:00～

スリランカ映画を見る会

【満月の日の死】 プラサンナ・ビターナゲー監督

1997年/スリランカ・日本/カラー 75分 ●アミアン国際映画祭グランプリ ●フリプール国際映画祭、FIPRESCI 賞受賞 ●シンガポール国際映画祭最優秀男優賞受賞 他

2009年1月18日(日)

17:30～20:00

於:まちだ市民フォーラム3F

視聴覚室 小田急線町田駅(東口)徒歩7分

JR横浜線町田駅(バスターミナル口)徒歩3分)

独立戦争が続くスリランカ、村に暮らす盲目の老人は、息子を政府軍兵士としてとられ、末娘と暮らすが、或る日、息子の棺が届く…



▶入場:無料

▶申込み&問合せ:TEL/FAX:042-735-9587(日本スリランカ文化交流協会)

★★★★ スワヒリ語教室 ★★★★★

お気軽にご参加ください

2009年1月21日(水)19:30～20:30

橋本公民館小会議室

参加費:1000円(資料代・お茶代)

●参加ご希望の方は、事前にご予約を。

●申込み&問合せ:

アフリカンコネクション 竹田 悦子

☎:090-6478-3441

FAX:042-733-0807

メール:etsukotakeda@hotmail.co.jp

▶ご質問等もお気軽にお願ひします。

▶皆さんの参加を楽しみにしております。

今年も美味しいシュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)がみんなを待っている!!

!!! 'わんりい' 新年会へようこそ !!!

於:麻生市民館・料理室(小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)

2009年2月1日(日) 11:00～14:00

●定員:40名('わんりい'会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)

●参加費:1500円 ●申込:メールかTEL/FAXで下記へ。

Email:wanli@jcom.home.ne.jp TEL/FAX:042-734-5100

●新年会メニュー:1.ほっこり美味しい「羊肉のしゃぶしゃぶ」囲んで歓談

2.ビンゴ 3.お笑い福引 4.他

・今年の新年会の歌は「長江之歌」と「回家看看」です。

「中国語で歌おう!会」(1月23日、まちだ中央公民館・音楽室1)で

上記の2曲を練習します。体験無料です。是非お出掛けを!!

【1月の定例会】 — どなたでもどうぞお出掛けください。

●定例会:1月20日(火) 13:30～ 田井宅 ●毎年、2月号のおたよりの発行はありません。